

星の世界から

小川未明

青空文庫

良吉りようきちは貧しい家いへに生まれまうした。その村むらは寂さびしい、森もりのた
くさんある村むらでありました。小鳥ことりがきてさえずります。また春はるに
なると、白しろい花はなや、香かおりの高たかい、いろいろの花はなが咲さきました。

良吉りようきちには仲なかのいい文雄ふみおという同おなじ年としごろの友ともだちがありま
した。二人ふたりはいつもいっしょに棒ぼうを持もつたり、駆かけつこをしたり、
また、さおを持もつて河かわにいったりして、仲なかよく遊あそびました。

村むらはずれには河かわが流ながれていまみした。その水みづはたくさんできれ
いでありました。河かわのほとりには草くさが茂しげっていました。二人ふたりはその

草くさの上うへに腰こしを下おろして、水みずを見みつめながら釣つりをいたしました。

また風かぜの吹ふく日ひには、いっしょにくりの実みを拾ひろつて歩あるきました。

また枯かれ枝えだなどを拾ひろつてきて、親おやの手助てだすけなどをいたしたことも

ありました。こうして二人ふたりは、なんでも持もつているものは、たが

いに貸かし合あつて仲なかよく遊あそびました。たまに両りょうしん親おやが町まちへいつて

買かつてきてくれた絵草紙えぞうしや、おもちゃなどがあると、それを良りよう

吉きちは文雄ふみおにも見みせてやったり、貸かしてやったりいたしました。

また、文雄ふみおも同じおなじことで、なにか珍めづらしいものが手てに入はいると、きつ

とそれを良りよう吉きちのところへ持もつてきて見みせました。二人ふたりの間あいだで

は、なんでも差別さべつなくして仲なかよく遊あそびました。だから、その村むらは

町まちから遠とおくはなれていて、さびしい村むらでありましたけれど、二人ふたり

はけつしてさびしいとは思いませんでした。二人はいつも、楽しんで仲よくして遊んでいました。

しかし、不幸というものは、いつ人間の身の上になんてやってくるものかわかりません。ある寒い、もう秋も老けてゆくころでありました。文雄は、ふとしたかぜをひきました。そして、それがだんだん重くなつて床につきました。良吉は心配して、毎日のように文雄の家へ行っては、病気をみました。文雄の両親もいつしようにけんめいで看病いたしました。けれど、ついに文雄はなおりませんでした。枕もとにすわつて、心配そうに自分の顔を見つめている、友だちの良吉をじつと見て、「早くなおつて、また君といっしょに遊ぼうね。」

と、文雄ふみおはやつれた姿すがたになりながら、につこりと笑わらっていました。

「ああ、遊あそぼうよ、君きみ、気分きぶんはちつとはいいいかい。」
と、良りようきち吉きちは笑顔えがおになって、そのやせた哀あわれな友ともだちの手てを握にぎりました。しかし、これが別わかれでありました。とうとう文雄ふみおはその晩死ばんしんでしまいました。

二

良りようきち吉きちは悲かなしさのあまり泣なきあかしました。文雄ふみおは村むらのお寺てらの墓ぼ地ちに葬ほうむられました。良りようきち吉きちは文雄ふみおのお葬そうしき式しきのときにも泣な

いてついてゆきました。それからというものは、彼かれは毎まい日にちのよ
うに暇ひまさえあればお寺てらの墓ぼ地ちへいつて、文雄ふみおの墓はかの前まえにすわつて、
ちようど生いきている友ともだちに向むかつて話はなすと同おなじように語かたりまし
た。

「君きみ、さびしいだろうと思おもつて僕ぼくは遊あそびにきたよ。」

と、良り吉よきちはいいました。木枯こがらしは、そのさびしいほかには
だれも人影ひとかげのいない墓ぼ地ちに吹ふきすすんで、枯かれた葉はが、空そらや、
地ちの上うえにわびしくまわつていました。そして、しばらくそこに良り
吉よきちはいますと、やがて日ひがうす暗くらくなります。すると彼かれは名な
残ごりお惜おしそうに帰かえつてゆくのでありました。

けれど、良り吉よきちの一家かは事じ情じょうがあつて、その明あくる年としにこ

の村むらからほかの村むらへ移うつらなければならなくなりました。良吉りようきち

はまたしばらく文雄ふみおのお墓はかにもおまいりができなくなると思おもつて、

ある日ひのことお墓はかへおまいりに参まいりました。そして、そのわけを

いつてから、彼かれは名残惜なごりおしそうについにこの村むらを離はなれたのであり

ます。

今度こんど、良吉りようきちの一家かの越こしてきたところは、ある金持かねもちの家いえ

の隣となりでありました。その金持かねもちの家うちにも、ちようど良吉りようきちと同おな

じ年としごろの力蔵りきぞうという子供こどもがありました。そして、二人ふたりはじき

に友ともだちとなりました。

力蔵りきぞうはほしいものは、なんでも買かつてもらいました。流行はやりの

おもちゃも、きれいな本ほんも、いろいろの物ものを持もっていました。

そして、それらのものを家の外いえそとに持つてきては、同じ年おなとしごろの友ともだちにみせました。良吉りようきちにはまだはじめて見るみような、名なも知らない珍めづらしいおもちゃがありました。けれど力蔵りきぞうはだれにもそれを貸かしてくれません。たとえ貸かしてくれても、すぐにそれを取とつてしまいました。

良吉りようきちも心こころの中で、自分じぶんもあんなおもちゃがほしいものだとおもいました。彼かれは飛行機ひこうきや、モーターボートや、オルゴールや、空気銃くうきじゆうなどは一つも持つてみたことがありません。どれでも力蔵りきぞうが持つているようなおもちゃの一つでも自分じぶんが持つていたならば、自分じぶんはどんなにうれしいかしの思おもいました。

力蔵りきぞうが持つている、いろいろなおもちゃの中なかでも、彼かれのいち

ばんほしいと思つたものは飛行機と、オルゴールでありました。

そのオルゴールは、なんともいえないいい音色がするのでありました。

「力蔵さん、私にすこしその鳴るおもちゃを貸してくれない？」

と、良吉はある日、外で力蔵がオルゴールを鳴らしている

そばへいつて頼みました。すると、力蔵は頭を左右に振つて、

「いやだ。これを貸すと、君はすぐに、壊してしまうもの。」

といいました。

「大事にして持つているから、ちつとばかり貸してくれない？」

と、良吉は目に涙をたたえて頼みました。

「僕は、人に貸すのはいやだ。」

といつて、力蔵りきぞうは貸かしてくれませんでした。

三

良吉りようきちはしかたがないから、林はやしなかの中なかに入はいつて竹たけを切きつてきて、自分でそれじぶんに小ちいさな穴あなをあけて笛ふえを造つくつて吹ふいていました。すると、四方ほうから小鳥ことりがそれを聞ききつけ集あつまつてきて、近間ちかまの木きの枝えだに止とまつてその笛ふえを自分じぶんらの友ともだちだと思おもつていつしよになつてさえさえずつていました。この有あり様さまを見みると力蔵りきぞうはすぐりようきちに良吉りようきちの持もつている笛ふえが欲ほしくなりました。

「君きみにオルゴールを貸かしてあげるから、その笛ふえを僕ぼくにくれないか

と、今度力蔵は良吉に向かつて頼みました。良吉は快く承諾して、その笛を力蔵に与えました。そして、自分をはじめてオルゴールを手を持つことができ、大事そうにして、この不思議な音色のする機械をながめていました。すると力蔵はすこしばかりたつと彼のそばにやってきて、

「僕はもう家へ帰るんだから、オルゴールを返しておくれ。」

といった、良吉からそれを取り返して持つてゆきました。その後で、良吉はさも名残惜しそうにして、力蔵の後ろ姿を見送っていました。

良吉の住んでいる家はあばら屋でありました。そして、良

ようきち
吉 は床とこの中なかに入はいつてから、昼間ひるま見たオルゴールや、飛行機ひこうきのことなどが心こころの目めからとれないで、それを思い出おもして天てんじようを仰あおいでいますと、窓まどから、はるか高い青空あおぞらに輝かがいでいる星ほしの光ひかりがもれてきて、ちようど良吉りようきちの顔かおの上うえを照てらしているのであります。

その星ほしの光ひかりはなんともいえない美しい光うつくを放ひかりつていました。金き色いろのもあれば、銀色ぎんいろのものもある。また緑みどり色いろのもあれば、紫む色いろのもの、青色あおいろのものもありました。良吉りようきちは、自分じぶんはなんのおもちやも、また珍めづらしいものも持もたないけれど、この空そらの星ほしだけは自分じぶんのものにきめておこうと思おもいました。そして毎晩まいばん、あの星ほしの光ひかりをみつめて寝ねようと思おもいました。

良吉は、毎晩、寢床の中に入ると、窓からもれる星の光

を見ていろいろのことを考えていました。——すると、ある晩の

こと、不思議にも窓から、彼を手招ぐものがあります。良吉

は起きていつてみますと、それは文雄でありました。良吉は

あまりのなつかしさに文雄の手を堅く握りしめました。

「僕はこの星の世界へいつているんだよ、星の世界にはもつと速

い、いい飛行機もあれば、もつといい音色のする楽器もあるよ。

今度くるときに僕は持つてきて君にあげるよ。僕は、いまその飛

行機に乗つてきたのだ。これから僕は毎晩、ここへたずねてく

るよ。だから君はもうさびしがらなくていいよ。」

と、文雄はいいました。

「ああ、ほんとうに君は毎晩遊びにきておくれよ。僕はさびしくてたまらないのだから。」

と、良吉は目から熱い涙を流して、友の手にすがりました。

しかし友の手は氷のように冷たかったです。そして、顔の色は、ろうのようになすきとおって見えませんでした。良吉は変わり果てた友の姿が悲しくて、また泣いたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年倶楽部」

1917（大正6）年9月

※表題は底本では、「星《ほし》の世界《せかい》から」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星の世界から

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>